柳井津小田家の

厳島旅日記

―万延元年「いつくしま日記」―

「芸州吉田行程記」福尾猛市郎収集史料22

目次

目次 …… 1
解説 …… 2
凡例 …… 4
いつくしま日記 …… 5

図１　「いつくしま日記」関係図

解　説

平成27年度古文書実践講座の２班は、江戸時代の防長人による中国・四国の旅をテーマに、３つの旅日記を解読した。そのひとつが、岩国藩領柳井津（現柳井市）の小田家の旅日記「いつくしま日記」（当館蔵、柳井市金屋小田家文書913）である。万延元年（一八六〇）、小田氏が安芸国厳島を訪れた六月二十三日～晦日の様子が記されている。

小田家は、柳井津町を代表する商家で屋号を室屋という。江戸時代、反物・打綿などの商い、油・蝋・鬢付油の生産販売、地主経営、塩田経営などで発展をとげた。十八世紀には町年寄役を務めている。岩国藩への度重なる献金の功により、同家は家筋代々大年寄格、帯刀御免を認められ、さらに寛政七年（一七九五）には岩国藩の士分に取り立てられた。幕末期には大組士にまで上昇している。

「いつくしま日記」の旅の主は、小田家六代目当主六左衛門（光迢、明治十二年没）と考えられる。旅には、算用方の素好（旅行中の出納係・裏表紙に名前有）のほか、数人が同行したと推測されるがはっきりとはわからない。

六月二十三日、にわかに宮島参詣を思い立った六左衛門は、翌日柳井津を出帆し、途中大畠瀬戸を通り、阿多田島に立ち寄りながら二十六日に宮島に到着した。宮島では神社参詣はもちろん、町見物、芝居、人形浄瑠璃、軽業見物、買物などを楽しんだほか、関係は不明だが弘津氏なる人物とも面会している。二十九日、宮島を発ち、晦日朝、柳井津に無事帰り着いている。

「いつくしま日記」は、旅中の出来事を記した日記部分と支出を書き留めた「諸雑用控」部分からなる。後者からは、旅中、何にどれだけ使ったかがわかり興味深い。杓子購入の記載が宮島らしい。

なお、この文書については、『柳井市史　通史編』（柳井市　一九八四年）の中で、柳井津商人による神社仏閣への参詣事例として紹介されている。また、中山富広「厳島訪問日記」（『厳島研究』七号二〇一一年）で全文が翻刻されている。その解説では、「（厳島の）夏市期間中の旅日記は管見の限り残っていないこと、また簡潔ではあるが芝居興行などの記述がある点からも史料的価値は高い」と評価されている。あわせて参照されたい。

平成27年度古文書実践講座２班　受講生

松永恵子・高橋由多子・中村睦美・石井　勇・中澤　淳・阿部和正

〈サポート〉山﨑一郎・和田秀作・吉積久年（山口県文書館）

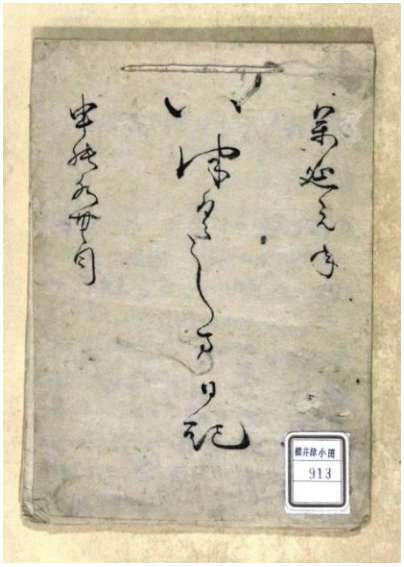

写真１「いつくしま日記」表紙

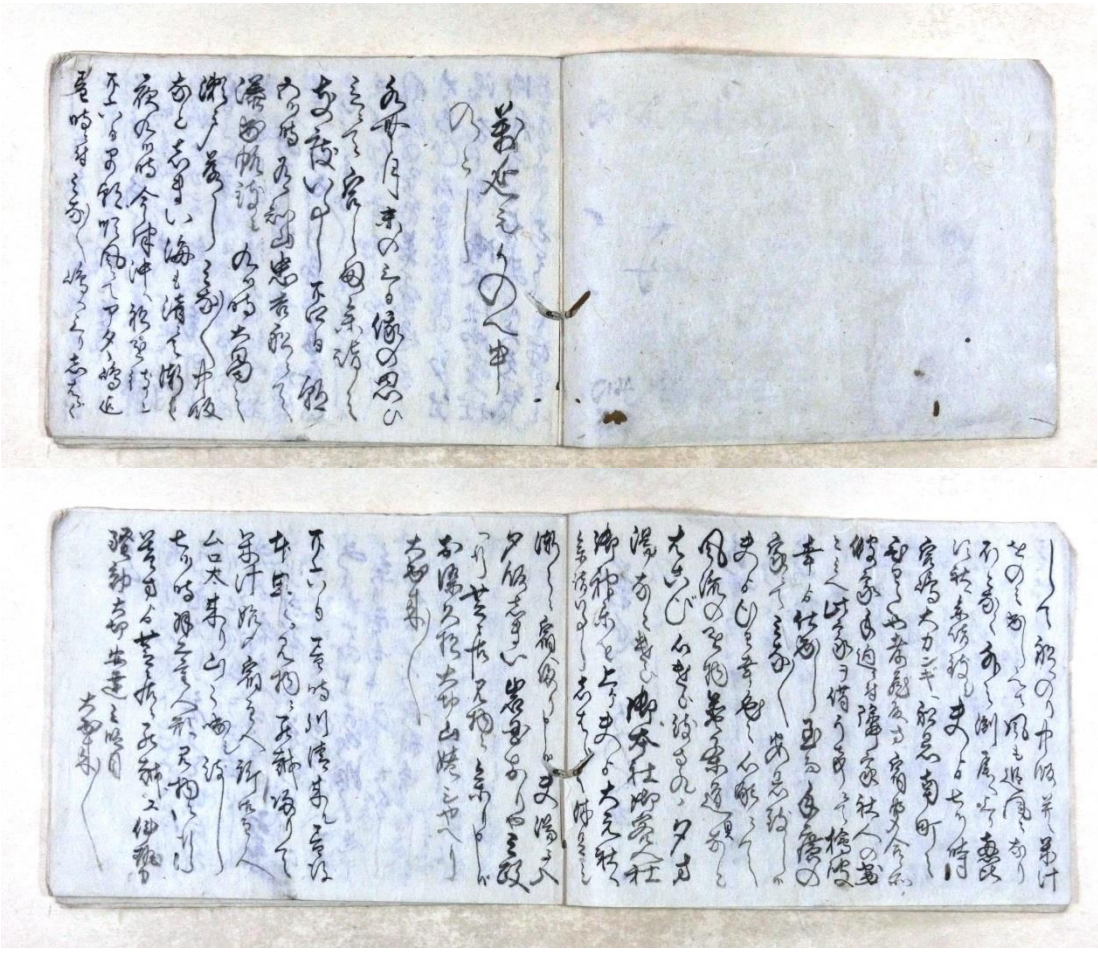

写真２日記部分の記載

凡例

一、当史料は、平成27年度山口県文書館古文書実践講座２班の受講生が解読したものである。

一、漢字は原則として常用漢字を使用した。

一、変体仮名及び慣用的合字は、「江」（え）、「而」（て）、「者」（は）を除いて、原則として平仮名に改めた。

一、適宜、読点および並列点を付した。

一、抹消部分は、原則として訂正部分をそのまま本文とした。

一、改行や割注は原則として原本のままとしたが、意味をとりやすくするため、改めた場合もある。

一、説明として加えた傍注は（　）で示した。

一、本文右上に小活字（　）書きで付した数字は、講座で用いたテキストの頁数を示している。頁の区切りには破線を入れた。

一、難読部分は、参考のため該当箇所の写真を添付した。

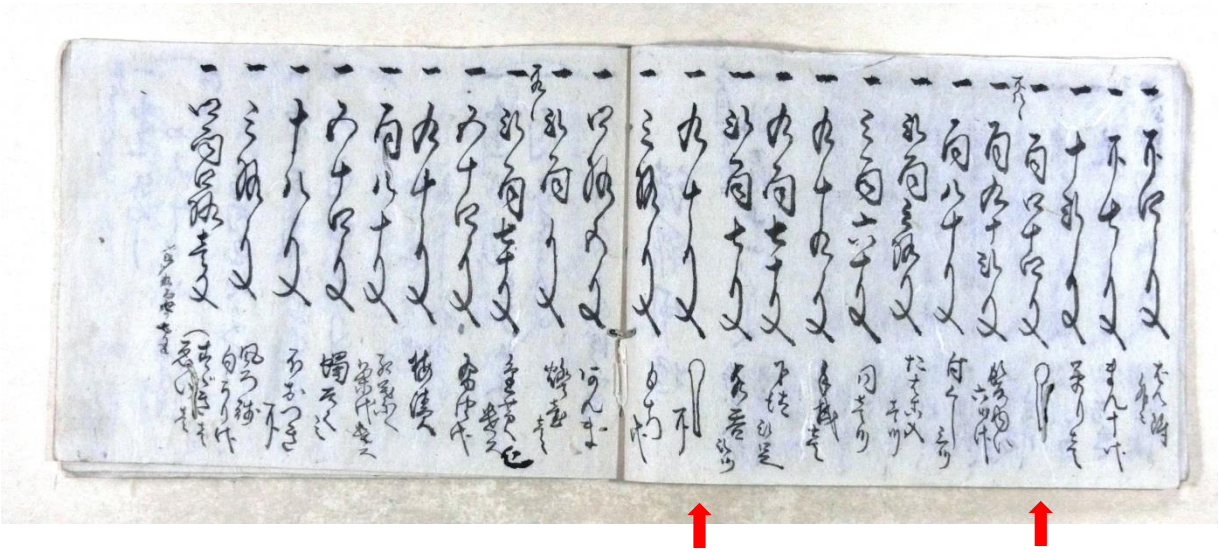

写真３「諸雑用」控部分の記載　　*杓子の絵文字あり

いつくしま日記

①

（表紙）

（一八六〇）
万延元年
いつくしま日記
申の水無月

②

（庚　申）（歳）
万延元かのへ申のとし

万延元年六月二十三日 **水無月末の三日**、俄の思ひ

宮島参詣発願 立ニて宮しま参詣之

六月二十四日 柳井津出帆 支度いたし、**廿四日**朝

五ツ時有知山忠吉船ニて

大島瀬戸 湊出帆致し、九ツ時大島之

瀬戸落し、みな〳〵中飯

なとしまい、海も渚（凪カ）ニて漸く

今津沖 夜九ツ時今津沖へ船懸致し、

六月二十六日 阿多田島 **廿六日**早朝順風ニて、アタヽ島迄

昼時ニ付みな〳〵島へ上り、しはらく

③

米汁（酒） して船へのり中飯并ニ米汁

をのみ出し候へ者、風も追風ニなり、

恵比須社 ほとなく外之渕屋へ上り恵比

須社へ参詣致し、夫より七ツ時

宮島 宮島大カンギ（雁木）へ船着、南町之

檜皮屋孝蔵 ひわたや孝蔵殿方宿聞合候所、

彼家手迫（手狭）ニ付、隣家社人の宅

とみへ、此家ヲ借うけニて檜皮

幸より仕出し、至而手広の

家ニてみな〳〵安着致し候、

夫よりひわ幸色々心配ニて、

風流の懸物煎茶道具なと

はこび心遣ひ致され候、夕方

湯など遣ひ、御本社御客人社

神楽奉納 大元神社 御神楽を上ケ、夫より大元社へ

参詣いたし、しはらく休息し、

漸々ニ宿へ帰り申候、夫湯ニ入、

夕飯しまい、岩国おりや三政

芝居見物 へ行、芝居見物ニ参り申候、

お染久松大切山姥シャヘリ

大出来〳〵

六月二十六日 **廿六日**、昼時川清来ル、昼後

本町へ見物ニ罷越、帰りて

米汁 米汁始メ宿主人新御主人

ムロ太来り山々咄シ致し候、

羽二重人形見物 七ツ時羽二重人形見物ニ行候、

芝居見物 暮方より芝居ニ罷越ス、伊勢

騒動大切安達三段目、大出来〳〵

④

六月二十七日 **廿七日、**

町中見物
存光寺町
坂田屋

町中見物、トンコウ寺町（存光寺町）ニて
高蔵方行、戻り懸坂田屋

弘津氏

へ行、弘津氏ヲ見舞申候、

紅葉谷
抹茶
米汁

夫より宿主人同道ニて紅葉
へ行末茶（抹茶）ヲ呑、米汁始り、其

姫

処へ弘津老人・河清両人相見へ、
又々大はづみ相成、姫も追々
参り面白キ事ニ相成申候、
夫より下先へ罷越涼み申候、
九ツ時宿へ帰り休み申候

六月二十八日 **廿八日、**

町見物
昼芝居

朝より町へ買物并ニ見物ニ出、
九ツ時より昼芝居へ行、すが原
大当り大出来〳〵、芝居
相済罷出、三政前ニて岩国石村
子并ニ家内衆ニ出合、みな〳〵

軽業見物

同道ニてカルワサ（軽業）見物ニ罷越、
夫より石村子外みな〳〵

抹茶
米汁

同道ニて宿へ連帰り、末茶一碗
差出し、夫より米汁相始メ、

紅葉谷

夜中紅葉へ涼みニ罷越、夫より
又々町へ見物ニ罷出、ほどなく
帰り休み申候、

⑤

六月二十九日 **廿九日、**

宮島出帆

早朝より出帆支度致し、
茶屋払・宿払抔いたし、
宮島ソンコウジ（存光寺）ノ船を借、五ツ時
乗込、直様帆ヲ懸、七ツ半時迄

岩国新湊

岩国新湊へカヽり潮待致し候
夕方より船出し、翌晦日朝

柳井津帰着

五ツ時柳井湊へ帰岸仕候
みな〳〵〳〵無事ニて
目出度申候

諸雑用控

諸雑用控

六月廿五日

一弐百十六文　「御本社様・御客人様
　　〆御神楽」
一廿四文　両社へ奉幣
一六十文　大元ニて茶代
一五十四文　焼酎代
一弐百七十四文　松金油ニ瓶

廿六日

一三拾文　千畳敷茶代
一十弐文　杓子　弐ツ
一九十文　うなき

廿七日
一四拾八文　羽二重人形
内茶代
⑥
一廿四文　ばん付外ニ
一廿七文　まん十代（饅頭）
一十弐文　草り壱
一百四十四文　 （杓子）

廿八日
一百九十弐文　髪ゆい六ツ代
一百八十文　付くし三ツ
一弐百三拾文　たはこ入壱ツ
一三百六十文　同　壱ツ
一九十九文　手拭壱
一九百七十文　下駄弐足
一弐百七文　水呑弐ッ
一九十文　 （杓子）廿
一三拾文　もち代
一四拾五文　あんま
一弐百文　灯台壱

廿九日
一弐百七十文　金芳へ遣ス
一五十四文　醤油代
一九十文　梅漬
一百八十文　紅葉へ茶代遣ス

一五十四文　燭そく三
一十八文　ほおつき廿
一三拾文　風ろ銭
白うり代
一四百四拾壱文　すゞき壱
ゑい壱
〆三貫九百四十七文

⑦
廿七日分
一金弐分　内九十文　広壱匁戻り
正ニ　坂周国注文前

廿九日分
一金壱両弐歩弐朱
一五百九十七文
〆
ひわたや注文前
もみし茶屋、同断

廿九日分
一金弐両弐分弐朱
一百廿壱文
〆
折屋三政へ注文前

晦日
一金壱歩弐朱　船ちん払

廿五日
△金壱朱　長せ貞船へ肴料包
△七六　弐匁七分　船ニて肴買
△金壱歩　ひわ孝へ茶代包
△金壱朱　新氏へ肴料包
△同壱分　千畳敷買物代
一百八十文　さいばし五わ
一六百七十五文　大食籠壱ツ
一弐百十六文　うちわ四本
一廿七文　小うちわ壱本

⑧
一五十四文　辻(辻占)うら弐袋
〆壱貫七百八十文

〆丁〇六貫五百三拾五文
〆金五両弐朱
丁〇七十弐匁四分〆三拾二貫三百九十四文
合三拾九貫九百廿九文
外ニ、百八文　前作へかし

都合四拾貫三拾七文
惣買物〆高
但シ、△印分〆へ不入

此所
一金六両　受込〆高
丁〇ニシテ三拾九貫九十六文
一三百六十文　広四匁受込
〆三拾九貫四百五十六文
受込〆高

差引
残五百八十壱文　不足

⑨
内　百廿九文　残り銭有
残四百五十弐文　不足
勘定方へ相渡ス
算用相済

但シ
金壱両ニ付
広札七十二匁四分定
丁〇ニシテ壱匁ニ付、九十文之定

引受銀覚

廿五日
一金壱両　受込
一三百六十文　広四匁受込

廿九日
一金四両壱分　受込
一同壱分弐朱　受込
一同壱分弐朱　受込

〆

(10)

(裏表紙)

〈叶
小田氏
算用方
素好存之

(終)